秩序とイニシアティブ

吉　澤　昌　恭

I　理想の社会秩序

ラッセルは，その著『西洋哲学史』の近代哲学を取り扱った部分の最初の章を次のような言葉でしめくくっている。

古代世界は，ローマ帝国の中に無秩序の終焉を見出したが，ローマ帝国は一つの残忍な事実であって観念ではなかった。カトリック世界は，一つの観念であったところの教会の中に，無秩序の終焉を求めたのだが，その観念は事実の中に，けっして適切には具体化されなかったのである。古代および中世の解決のいずれもが，満足すべきものではなかった。前者は観念化され得なかった故に，そして後者は現実化され得なかった故に。近代世界は現在にあっては，古代のそれに似た解決の方向に，動きつつあるように見える。すなわち庶民の希望よりも，権力あるひとびとの意志を代表する力によって，強制されるところの社会秩序という解決なのである。永続しうる満足すべき社会秩序という問題は，ローマ帝国のもっていた堅固な構成と，聖アウグスティヌスの「神の国」がもっていた理想性とを，結びつけることによってのみ解決しうるのである。これを成就するためには，新しい哲学が必要とされるであろう。

ラッセルは，その後半生に於いて，こうした新しい哲学を模索し，ま

* 本稿は，「懐疑，科学，哲学」(『広島経済大学研究論集』，第7巻第1号　1984年4月）並びに「創造と成長」(同，第8巻1号　1985年6月）の続編である。

た，理想の社会秩序を実現するための実践活動に，多くのエネルギーを注いだのである。

II　科学技術の功罪

科学には二つの顔がある，とラッセルは言う。理論的科学と実際的科学がそれである。前者は世界を理解しようとする試みであり，理性にその根拠を持つ。そこに存在する権威は漸次的で部分的な性格のものである。

それに対して後者は世界を変革しようとする試みである。現在では，ガリレオの時代に比べて，後者の重要性がはるかに大きなものとなりつつある。それは環境を自らに好都合なように改変してゆく人間の能力を大幅に改善することによって，実際的な人々に力の感覚を与えたのである。それはまた，多数の人間の協力を，即ち，組織の重要性を飛躍的に高め，個人主義に逆行するものとなりつつある。

実際的科学は，倫理的には中立であり，いかなることを為すべきかを，人間に教えはしない。それが奉仕する目的は少なからず偶然に委ねられており，それが生み出す巨大な組織の指導者は，ある限度内で，それをどのように使うこともできるのである。従って，非人間的なものの全てが，更には人間さえもが，単なる原材料に過ぎないとみなされるようになり，全てが権力と操作の対象となるに到る，といったことも起り得るのである。

*　　　*　　　*

科学の実際的側面，即ち，科学技術には，当然のことながら，功罪両面がある。

科学技術は悪しき事ども（bad things）を減少させ，良き事ども（good things）を増大させてきた。それは，貧困と長時間労働から人間を解放することを可能にする。産業化の進展と民主主義の成長とが相まって，西洋世界での人々の生活水準が引き上げられてきた，とラッセルは言う。また，医学の進歩は人類にとってのこの上もない恩恵である。更に，科学技術は，

無法と暴力の削減にも貢献する。街灯，電話，指紋押捺，犯罪と処罰の心理学といったものがなければ，警察も犯罪の発生率を大幅に引き下げることはできなかったであろう。

他方，科学技術は良き事どもを増大させてもきた。ラッセルによれば，教育の普及や，自らの才能を生かし得る機会の増大がそうしたことの典型的な例である。かくして，以前にも益して，多くの人々が幸福になり得る可能性が増大してきたのである。

しかしながら，その反面で，科学技術は人類を不幸のどん底にたたき落とす能力をもその内に秘めている。何よりもそれは人間の殺戮能力を飛躍的に上昇させてきた。勿論，科学技術が戦争目的のために用いられることは何も現代に限られたことではない。しかし，現代とそれ以前の時代を画するひとつの事実は核兵器の存在である。これによって人類は絶滅させられるかもしれないのである。他方，現代の，そしてまた将来の科学技術は，過去のいかなる時代にも思いもつかなかった程の専制政治を登場させ得るのである。物理，化学上の知識のみならず，生物学，生理学そして心理学の知識を大動員することによって，独裁者がこの世の全てのことを意のままに取り扱う，ということは全く不可能だというわけではないのである。自然が改造されるのみならず，人間さえもが改造の対象となるかもしれない。極く少数の指導者層を除く大部分の者が，独裁者の発する命令に自ら従う，従順な羊の如き存在に変えられてしまうかもしれないのである。

*　　*　　*

科学技術が圧倒的な重要性を持つ社会を，ラッセルは，科学的社会(the scientific society)と呼ぶ。これは人為的に創造された社会である。この科学的社会が安定したものとなり得るためには，次の様な条件が満たされねばならない，とラッセルは言う*。

(1)　全世界にただ一つの政府があって，それが軍隊の独占権を持ち，そ

* The Impact of Science on Society, Chap.7.

れ故にまた，平和を励行し得ること。

(2) 繁栄が全世界に及び，従って，世界のある部分が他の部分にとって羨望の的になる，といった機会が存在しないこと。

(3) 到る所で出生率が低くなること，従って，世界の人口が静止状態になるか，ほぼそれに近くなること。

(4) 仕事と遊びの双方に於いて個人がイニシアティブを発揮し得るための備えを怠らず，必要不可欠な政治的，経済的枠組の維持と両立し得る範囲内で，可能な限り権力を分散すること。

世界国家が建設されて，その政府の努力によって，世界中のすみずみまで繁栄をくまなく行き渡らせることに成功するならば，今日，多くの発展途上国を悩ませている最大の難題のひとつである人口爆発に終止符が打たれるかもしれない。また，そうした世界国家の下では，人類を絶滅に導きかねない熱核戦争の危機は去ることであろう。

しかし，こうした世界国家の建設は決して容易なことではないし，ラッセルも明確にこのことを認識している。人間には，他人を味方と敵に分類しようとする性向が抜き難く存在するように思われる。敵の存在とその敵への恐怖は人々を結合させる最大の力のひとつである。従って，もし仮に世界国家が建設されたとしても，そこでは敵への恐怖心が存在しないが故に，この世界国家は常に分裂の危機にさらされ続けることであろう。

他人を味方と敵に分類しようとする人間の性向は克服不可能なのだろうか？世界国家を安定的なものにすることは不可能なのだろうか？人類を絶滅の危機から救い出すことは不可能なのだろうか？これらの問にはっきりとした答を与えることは，少なくとも現段階では不可能なように思われる。こういった意味で，科学的な社会が将来安定したものとなり得るか否かは決し難い問題である，とラッセルは告白している。ここではこれらの点についてこれ以上立入らないことにする。以下では，科学的社会が安定し得るための第四の条件について論ずることにする。

Ⅲ　科学技術と新しい専制政治

科学技術の帰結のある部分は，政治体制・経済体制のあり様によって，変わってくる。しかし，政治体制・経済体制のいかんに関わりなく，回避することのできないものも存在する，とラッセルは言う。彼によれば，科学技術の最も顕著で且つ回避不可能な帰結は，社会がより一層組織化されてゆく，ということである。社会の各々の部分の相互依存関係が増大してゆき，生産の領域では，このプロセスは二重に進んでゆく。一方で，ひとつの企業に勤める人々の相互の関係が緊密度を増してゆく。他方で，企業どうしの相互の関係が密接なものになってゆく。勿論，後者の関係は前者の関係程の緊密度を持たないのではあるが，社会全体の観点からすれば，前者の関係に劣らぬ重要性を持っている。

産業革命以前の農民は，自ら消費する食糧を非常に安価な道具を用いて生産することができた。従って，外部世界との関わり合いは最小限度のものに止まり得たのであり，そういった意味で、彼はほぼ完全な独立を享受し得たのである。もっとも彼の独立には貧困と飢餓という非常に高い代償が常につきまとっていたのではあるけれども。

現代農業はこれと対照的である。そこでは全てが他人に販売するために生産される。全ての農民が世界的規模の分業構造の中に組み込まれてゆく。とりわけ，カリフォルニア，カナダ，オーストラリア，アルゼンチンといった所では全てが輸出のために生産される。こうなると農民の運命は国際関係に著しく依存したものになる。依然として，農民は名目的には独立した存在であるのかもしれないが，実際には彼の繁栄は政治上の決定によって大きく左右されるのである。

工業化は人々の相互依存関係を更に緊密なものにする。工業化の最も顕著な特徴のひとつは都市の膨張とそこに住む人間の増加である。都市の住人は農民よりもはるかに社会的な存在である。彼は群集の中で働くだけではなく，彼の楽しみも群集の中で供給される。彼は工場で働き，労働組合

に所属し，いずれかの政党支持者となる。彼は新聞を読み，映画を，そしてフットボールの試合を見る。これらのものはいずれも強力な組織なくしては存在し得ないものである。更に彼は雇主に，そして間接的には，彼の工場に原材料を提供したり，或いは，彼の工場の生産物を買ったりする人々に依存している。そして最後に，彼に税金を課したり，彼に戦場へ行くことを命じたりする国家に依存している。資本家であると労働者であることを問わず，都市の住人は組織から離れられないのである。

*　　　*　　　*

組織の巨大化は新しいタイプの権力を生み出す。いかなる組織も，この組織の運営に携わる人々を必要とする。ラッセルは，こういった人々を執行官（executive officials)と呼ぶ。彼らは，下は郵便局の女性職員から上は総理大臣に到るまで，国家権力の何がしかの部分を授けられる。組織が巨大化するにつれて，彼らの権力に対する統制は益々疎遠なものになってゆき，彼らの権力は自律化してゆく。執行官達の横柄な態度とそれに対抗するための手段の欠如とは，あらゆる人々をいらだたせる。

同様のことは民間部門でも起こる。企業規模の巨大化は，株主の支配力を名目的なものにしてしまう。実際に経営に携わる者は，様々な手段を講ずることによって,自分達の企業経営上の権力を自律化することができる。株主による経営陣の選挙も単なる偽装に過ぎないものとなってしまう。労働組合もこうした趨勢から逃れられない。労働組合の規模の巨大化は，執行部と一般組合員との意志疎通を希薄にさせ，また，両者の間の利害の食い違いを招来することであろう。

官僚，企業の経営者，労働組合の幹部といった人々の権力は，確かに，名目的には外部からの統制に服している。しかし，実際にはこういった人々の権力に統制を加えることは容易ではない。また，彼らの権力は舞台裏の権力であり，そのことの故に，表立って責任を追及することの困難な権力である。彼らは，事実上彼らによって支配される人々について多くを知

らない。組織の規模の拡大はそうしたことを不可能にするし，また，彼らにそれを強いるような要因も存在しない。かくして彼ら執行官の権力は強力なものになってゆく。もし，彼らが科学技術を積極的に動員しようと決心するならば，科学的社会以前の時代には決して存在し得なかった様な，全く新しいタイプの専制政治が出現し得るのである。

*　　　*　　　*

科学的社会に於ける権力者は，それ以前のいかなる時代の権力者よりもはるかに徹底的に，自らにとって都合が悪いと思われる意見を統制することができる。学校教育を統制することによって，青少年の心を，公式の説以外のあらゆる見解に対して閉ざすように仕向けることができる。出版・放送・映画といったものを統制することによって，公式の説を広く一般大衆に宣伝することができる。また，スパイの制度を用いることによって，全ての人を疑心暗鬼の状態に追い込み，異端説を保持する者の告発を人々に余儀なくさせることもできる。それでも尚，自説を曲げない人がいるならば，そういった連中は，収容所で強制労働させることによって，世間から隔離すればよいのである。

生理学や心理学の知識を駆使することによって，人々の心の統制を更に強力に推し進めることもできよう。大衆に対して，ある種の食物や薬品を与え，また，ある種の暗示を与え続けることによって，そもそも当局の発表する見解以外のいかなるものにも反応を示さなくなる様な人間を造り出して，権力の座にある者に対する批判を心理的に全く不可能にしてしまうことも夢ではない。いかに不幸な状態にあろうとも，権力者が「おまえ達は実にしあわせなのだ」と告げたが故に，自分達はしあわせであるに違いない，と信じるような大衆を造り出すことができたならば，権力者の地位は盤石のものとなろう。

生殖を人為的に統制することによって，支配するもの達と支配される者達の間に越え難い程の差異を生み出すことも不可能ではない。遺伝学上の

知識と人口受精の技術を用いることによって，一方では，知力・体力共に優れた支配者を育成し，他方では，家畜の如き地位を甘受させられる兵士，肉体労働者を再生産し続けてゆくならば，やがて，両者はほとんど別の種に属する生き物であるかの如くに見えるようになるかもしれない。こうなればもはや，羊肉を食するという習慣に対する羊達の組織的な反逆が考えられないのと同じ程度に，平民達の反逆も想像し得ないものとなるであろう。

* * *

科学技術によって支えられた，上述の如き新しいタイプの専制政治は安定的なものとなり得るであろうか？

科学的な専制政治が内部の諸要因によって自己崩壊する必然性はない，とラッセルは言う。なぜなら，自分達の主人に完全に服従する大量の奴隷達を抱えた社会が，過去に存在したからであり，科学技術の発達はそうした社会の存続をより容易なものにし得るからである。

しかし，そうした社会が他の社会と戦争を行う段になると，事情は違ってくる。等しい自然資源を持つ，専制政治の行われている国と，個人に自由が許されている国とが相争うならば，遠からぬ時期に，戦争技術の点に於いて後者は，ほぼ確実に，前者を凌ぐに相違ない，とラッセルは言う。科学的研究の自由と独裁は両立し難いからである。もし，ヒトラーがユダヤ人の物理学者を受容していたならば，彼は戦争に勝利していたかもしれないのである。ラッセルは，強力な民主主義が存在し続ける限り，長期的には民主主義は勝利を収めるだろう，という穏和な楽観論を開陳している。

たとえ戦争が起こらなかったとしても，専制政治は，やがて，弱点をさらけ出すであろう。全ての新しい思想が異端として斥けられ，支配者が自らの安全を確信するならば，早晩，彼らは怠惰になり，環境の変化への適応能力を失ってしまうだろう。こうなると，新たな精力的な人々が彼らに取って代わる可能性が大いに増大する。専制国家での権力闘争が，やがて，

その国家の屋台骨をゆるがすことになるかもしれない。

以上のような理由から，ラッセルは，科学的な専制政治は長続きしない，と結論するのである。但し，そうした専制政治が世界的な規模のものとして確立された時は，話は全く別である。

Ⅳ　民主社会主義者の理想

良き社会に於いては，全ての人が同時に三つの役割を演じなければならない，とラッセルは言う。まず第一に，人はヒーローとして，イニシアティブを発揮させる機会を持たねばならない。第二に通常人としての彼に安全が保障されねばならない。そして最後に，彼は一歯車として，つまり，社会の一構成員として有用でなければならない。これら三つのもののいずれもが，それだけでは理想の社会を生み出し得ないのである。

しかし，科学的社会に於いては，人は従来以上に歯車としての役割を強いられるようになり勝ちである。科学技術は，社会をより一層組織的なものにすることによって，個人が一歯車としての役割を果たすことの重要性を増大させる。もし，このことが邪悪な帰結を生み出すべきでないとすれば，彼が単なる一歯車になり下がってしまうことを防ぐ何らかの方法が見い出されねばならない，とラッセルは言う。従って，各人がイニシアティブを発揮する機会の保持が，科学的社会に於いては，益々重要になってくる。大抵の場合，イニシアティブを発揮するということは，広い意味での「政治的」行為を含意しており，それはまた，ある組織が何を為すべきか，についての何がしかの発言権を含んでいるのである。それ故に，各人がイニシアティブを発揮する機会を保持するためには，全ての組織は可能な限り民主的に統治されねばならない。つまり、全ての精力的な人間が，自らの所属する組織に対して何らかの影響力を行使し得るのだ，という希望を持てるようにしなければならないのである。

しかし，民主主義に難点がないわけではない。例えば，アメリカの大統領選挙を取り上げてみよう。普通の市民にできるのは一票を投ずることだ

けである。ある人の一票が選挙結果を逆転させ得るのだ，と考えることは容易ではない。従って，人は，独裁者の下で暮らしている場合と同じように，無力感を感じるかもしれないのである。イギリスでは事情はそれ程悪くはない，とラッセルは言う。なぜなら，全国を一つの選挙区とするような選挙がイギリスには存在しないからである。しかし，それも程度の差に過ぎない。他方，地方政治に大きな期待をかけることもできない。確かに地方政治に於いては，個人が影響を及ぼし得る可能性は増大する。しかし，国政に対してと同じ程の熱意を持って地方政治に当たる人は少数である。なぜなら，大抵の重要問題は，地方に於いてではなく，中央に於いて決定されるからである。

*　　　*　　　*

ラッセルはフェデラリズム（federalism）を提案する。全ての出来事が対内的な出来事（home affairs）と対外的な出来事（foreign affairs）に区分される。前者は各個別主体の自治に委ねられる。後者のみがより上位の権威によって調整されるのである。フェデラリズムの原則の下では，より小さな組織から始まって，より大きな組織を経て，そして最終的には世界政府へ到るのである。この最後の世界政府にとっては，対外的な出来事は存在せず，そこに残されているのは下位の組織の間に起こる紛争の調停だけということになる。

勿論，ある出来事が対内的なものか対外的なものか，の判定が常に容易に下せるわけではないだろう。しかし，フェデラリズムの原則が明示され，また，この原則の遵守が高らかに謳われるならば，多くの場合，問題は容易に解決されよう。そして，判定の困難な事例のみが法廷に託されればよいのである。

こうした原則が守られるならば，各人がイニシアティブを発揮する機会が増大するであろう。そして，対外的な出来事についてのより上位の権威による調整が，各々の段階で，順調に進められてゆくならば，秩序も保た

れるであろう。

* * *

ラッセルは以下の如き民主社会主義の理想を掲げる*。但し，それは一般的な方向を指し示すものであって，絶対的なものではない。

(1) 私（＝ラッセル）が人は「有用」でなければならないと言うとき，私はコミュニティとの関連に於いて彼について考えており，また，何が有用であるかについてのコミュニティの判定を受け入れている。もし彼が偉大な詩人であるか，或いは，セブンスデイ・アドベンチストであるならば，彼自身は，自分の為し得る最も有用なことは詩を書くことである，と考えるかもしれないし，或いは，土曜日が安息日となるよう説教して歩くことである，と考えるかもしれない。しかし，もしコミュニティが彼に同意しないのであれば，彼は，生計の資を稼ぐために，一般に有用であると認られている何らかの方法を見出すべきであるし，詩人や伝導師としての自らの活動を余った時間に行うべきである。

(2) 安全は，ロイド・ジョージの偉大な日々以来，英国社会立法の主要目的のひとつであった。失業，病気並びに老齢は処罰に値するものでないし，努力したならば回避し得るような苦悩を，それらがもたらすことがあってはならない。コミュニティは働く能力のある人々を働かす権利を持つが，働こうとする意志のある全ての人々を，実際に働く能力があるか否かに関わりなく，支援することもコミュニティの義務である。安全には法的な側面もある。人は，司法上の決定や立法上の決定抜きに，恣意的に逮捕されたり，財産を没収されたりすることがあってはならない。

(3) イニシアティブを発揮するための機会は一層困難な問題であるが，少なからざる重要性を持つ。有用性と安全は社会主義に理論的な根拠を与えるが，イニシアティブを発揮するための機会がなければ，社会主義

* The Impact of Science on Society, Chap.4.

社会にはほとんど何の利点もないかもしれない。プラトンの『共和国』やモアの『ユートピア』—共に社会主義的な著作である—を読んでみて，あなたがいずれかによって描き出されたコミュニティに住んでみると想像してごらんなさい。退屈さがあなたを自殺や反乱へ駆り立てる，ということが理解できるだろう。安全を決して手にすることのなかった人間は，安全によって満足できるだろう，と考えるかもしれない。しかし，登山からの類推を用いるならば，実際には，それはベース・キャンプに過ぎず，そこから危険な登坂が始まるのである。危険や冒険に対する衝動は人間本性の奥深くに織り込まれており，それを無視する社会は長きにわたって安定し得ないのである。…中略…あなたは選挙演説をすることができるし，或いは，それで満足できなければ，議員になることができる。古い自由主義的な自由が生き残っている限り，あなたは，あなたを興奮させるいかなるプロパガンダにも身を投ずることができる。そうした活動は，大抵の人間の闘争本能を満たすのに十分である。闘争的な性格を持たぬ創造衝動，例えば画家や作家の創造衝動をこうしたやり方で満たすことはできない。社会主義国家に於いては，自らの余暇を自分の好きなように使う自由が，そうした創造衝動を満たすための唯一の解決策となる。これは唯一の解決策である。なぜなら，そうした活動は時に非常に重要であるが，ある事例に於いて，画家や作家の作品が無価値であるのか，それとも彼らの作品が不朽の才能を示しているのか，を判定する何らの方法をもコミュニティは持ち合わせていないからである。それ故に，そうした活動は体系化されたり統制されたりしてはならない。人生の何がしかの部分—恐らく最も重要な部分—は，個人の衝動の自発的な活動に託されねばならない。というのも，全てがシステムとなる所では，心は死滅してしまうからである。

本稿は主として，バートランド・ラッセルの下記の著作に依拠して作成されたものである。

1. The Scientific Outlook, George Allen & Unwin, London 1931, 3. impression 1954.
2. Authority and the Individual, Goerge Allen & Unwin, London 1949, Unwin Paperbacks 1977.
3. The Impact of Science on Society, Goerge Allen & Unwin, London 1952, Unwin Paperbacks 1976.
4. 市井三郎訳『西洋哲学史』, みすず書房, 昭和45年 (History of Western Philosophy, 1946) 一近代哲学, 第一章.